

### ・「大ヒット」でも

しかし、である。ではヒットしたらいいのか、という問題が残る。私の『もてない男』という本は、十万部売れて、これは「大ヒット」と言ってもいい数らしい。ところが、それでいくらの印税が入るか。新書判だから、値段を七百円と考え、印税率は普通十パーセントだから、 $700 \times 0.1 = 70$ 、 $7000 = 7000$ 、 $70000 = 70000$ 。七百万円。「いいじゃないか」と思う人もいるだろう。けれど、当時の私は三十六歳。エリートサラリーマンならこの倍以上の年収がある。しかも、これが毎年続くわけではない。どのみちこれでは、マンションも買えない。「大ヒット」でこの程度なのである。斎藤孝の『声に出して読みたい日本語』は百万部を超えるミリオンセラーで、斎藤は続々と類書を出して売れているから、これなら人生変わるくらいの収入になるだろうが、それこそめったに訪れる幸運ではない。本を出せば斎藤孝になれると思うのは、相撲界へ入れば千代の富士や貴乃花になれると思うことくらい愚かなことなのだ。

### ・活字化を目指せば質を向上させる

いまインターネットのホームページなるものを覗くと、まあ実に多くの人が、たくさん本を読んではその感想文を日記のようなものに書きつけている。実のところ、レヴェルの高いものは高いが、低いものは恐ろしく低レヴェルで、読んでいて不快になることも少なくない。おそらく彼らは、自分の書いたものを人に読んでほしいのだろう。ホームページに目を止めた編集者から連絡があるのを待っているのかもしれない。それなら、私はこうした人々に、やはり活字の世界へ浮上することを勧めたいのである。実際、電子出版のようなものも試みられたが、あまりうまくは行っていない。確かにテキストが電子化されると、検索などには便利だが、線を引いたり付箋をつけたり、ということではできない。そして、活字にする、ということは、少なくとも編集者一人をはじめとする他人の目を通して、その人に認めてもらう、ということの意味する。それはホームページに書くより、よほど大変なことだが、それだけに、活字化を目指せば質を向上させることにもつながり、独りよがりも避けられる。

私が本書の執筆を引き受けたのは、なにより私自身が、読んで、書く、ということが好きで、そういうことの好きな人も基本的に好きだからである。

### ・学術論文、評論

学術論文は、地を這うように書かなければならないのである。よくもまあこんなちまちましたことを、と呆れるようなやり方で、先行研究を調べて検討し、資料を整理し、あたかも縫い物でもするようにちくちく書かれなければならないのである。「評論」を読んでいて楽しいのは、著者が直観を閃かせ、鮮やかと見える手際で謎を解き、それを飛躍した文章で読ませるからである。だから読んでいて、はっ、と胸が躍り、目からウロコが落ちた気分になる。

ところが、図書館へ行って、四十年くらい前の『芥川龍之介研究』とか『堀辰雄研究』とかいう本を開いてみると、不思議なことに、これが「学術論文」ではないのである。何やら一節を引用しては感激してみたり、ひどく文学青年じみた美文が並んでいたりする。そもそも、日本近代文学というのは、明治・大正期には「学問」の対象ではなかった。当たり前である。現代文学なのだから。今でこそ、生きていた作家を研究対象にしてもいいことになったが、つい十五年ほど前までは「安部公房や島尾敏雄は死んだから卒論で扱ってもいいのかな」などと国文科の学生が冗談混じりに言っていたくらいで、学問の対象は五十年たっていないなければならない、と言う教授もいた。ところが、古典文学なら、まず校訂、注釈といった仕事があり、それなりに「学問」らしい仕事があるのだが、近代文学となると、読めば読めてしまうので、本文確定、および作家の伝記研究が中心になって始まったのだが、そのうち、感想文のような「作品論」が現れてきた。そうすると、小林秀雄や中村光夫の言っていることを無視するわけにも行かなくなり、日本近代文学研究こそ、いちばん「評論」と「論文」の区別があいまいな世界になってしまったのだ。

## ・評論の基本的な姿

いち

ばんいけないのは、どこが学問的に慎重な部分で、どこが杜撰な部分なのか、書いている本人が分かっていないことだ。一般向けに書かれていて、学問を踏まえていながら、**厳密なアカデミズムの世界では言えないようなことを、少しはみ出す形で言う、これが評論の基本的な姿だ**と思ってもらえればいい。

## ・学術論文は、アカデミズムでの出世の役にはたつが、それ自体ではカネにはならない。

よくインターネット上のホームページで、朝食に何を食べた、昼食は何、今日はなににながあって、などと日記様のものをただ書いている人がいるが、本書の読者はまさか自分が食べたものを世間に公表したいわけではあるまい。つまりこの場合は、売れるか売れないか、が問題なのである。**学術論文は、アカデミズムでの出世の役にはたつが、それ自体ではカネにはならない。**カネにならなくてもいい、という人は「評論家」を目指しているわけではないのだから学者になればいい。あるいは、ただ自分の書いたものを人が読んでくれればいい、というような人は、インターネット上にただ書いていればいい。つまり**評論とは、あくまで、カネになる文章のこと**なのである。

## ・アブダクション

演繹法インダクション

帰納法ディダクション

話を戻そう。つまり「評論」は、思いつきやひらめきの産物である、ということになるのだが、米国の哲学者チャールズ・サンダース・パーズは、演繹法（インダクション）と帰納法（ディダクション）というけれど、帰納していった仮説を得るためには、やはり一種のひらめきが必要だろう、と説き、これを「**アブダクション**」と呼んだ。アブダクションというのは、誘拐、などという意味も持っているのだが、**ぱっと何かをする**、という程度の意味がある。確かにその通りで、学問と評論の違いは、そのアブダクション、仮説形成に至るまでに、どの程度の調査をしたかという、程度の違いにある、と言っても過言ではないだろう。

## ・文藝評論、人文学評論

数学や物理学なら、ある**限定された知識に基づいて何らかの結論を引き出すことができる**。ところが、こと文藝評論とか人文学評論で、ちょっとしたことを言おうとすると、知識量がものを言う。つまり、知識が大してなくても、基本的な訓練の上に半年の調査をすれば、近世の随筆の作者について論文は書けるけれど、仮説を立てようとするれば、知識量が多ければ多いほど**微密な仮説、正確な仮説が立てられる**のであり、そもそもこの世に、古今東西のあらゆる文書を読んだ人などいないのだから、知識の乏しい人の仮説より、**知識の多い人の仮説のほうが正確、厳密になる**。これは当然のことだ。

## ・どこが飛躍なのか分からなくなっている

日本人の書くものが非論理的になったのは、それこそ

小林秀雄が「飛躍と断定」をもっぱらとする評論、エッセイを書き、それが多くの読者を獲得したころからのことなのである。

ところが、日本の一般読書家は、そういう飛躍の多い文章に慣れているため、どこが飛躍なのか分からなくなっていることがある。

## ・詩

言うまでもなく**詩というものは、何かを順序だてて論理的に説明**

するものではない。ただ、**読者に対して何らかの気分を喚起することを目指している**。つまり「論理」より「美」が重要なのだ。そこで小林は、次第に奔放で非論理的で、しかし読者に不思議な爽快感をもたらす書き方を会得していったというわけだ。

なぜ柳田や吉本が受けたのか、ということを見ると、「謎解きができる」ということがあると思う。はっきり、**明晰に書いていないから、読者はおのずと、謎解きをしたくなる**。「ここはこう解釈すべきだ」「いや、俺はこう思う」などと言ひ合えるのだ。

#### ・ニーチェ、フロイト、ユングといった連中

E: マスコミ的に有名だが、その学問はインチキである

というのがいる。こういう人たちの淵源は、十九世紀末から二十世紀の西洋に現れた連中で、**ニーチェ、フロイト、ユング**といった連中だ。二十世紀最大の**インチキ学問**が精神分析だったというのが今の私の立場だ。ユングの場合、昔からオカルト扱いされていたが、フロイト、そしてラカンやクリステヴァまでインチキ扱いする私の立場は、アカデミズムでは必ずしも少数派ではないが、文学研究の世界に限定すると優勢ではない。

#### ・文藝評論のこけ威し

「むろん」が二度も出てくる。こういう、読者にとっては決して自明ではないことを、「むろん」とか「もちろん」とか「言うまでもない」をくつつけて言うのが、小林秀雄以来の日本の**文藝評論のこけ威し**である。

#### ・著者の体験

さて、文庫版あとがきに書いたことだが、**二十七歳で自分の本を出した私は**、まあ有頂天になっていたと、言ってよかろう。だが、新聞二社からインタビューを受けたほかは、書評は出なかったし、別に話題になるということもなかった。『文化会議』という薄い雑誌に、佐伯さんが優しい書評を書いてくださった。でもまあ、仲間褒めと言うしかないだろう。本は六月に出て、私は八月にカナダ留学に旅立っていた。いくぶん、本に関しては失意の気味があったのは否定できない。しかし編集担当だった女性は、小谷野さん小説を書いてみませんか、と言ってくれたので、**私は半ば、前途洋々の気持ち**になっていた。ところが、カナダへも半年ほど、福武書店の新刊を送ってくれていたその女性編集者から、ぱたっと手紙が来なくなった。あとで聞いたら、福武書店が出版事業を縮小し始めていたらしく、帰国後その女性からは、退職の知らせが来た。

**本は一向に売れている様子**はなかった。一方佐伯さんが、各種商業雑誌に盛んに執筆活動をしているのは、カナダにいても分かった。その翌年には、後輩の松居竜五が、やはり修士論文を朝日選書から『南方熊楠一切知の夢』として刊行して、小泉八雲奨励賞をもらっていた。**私の内心には、焦りがあった**。

・・・

帰国の翌年の一九九三年四月から、私は東京郊外の短大で英語の非常勤講師をしていた。実は友達の世界でこれが決まるまでは、予備校の教師でもするしかない、と思い、当たりをつけたところへ面接に行く途中で、あまりに遠いので帰ってきてしまった、などということもあった。この年も、佐伯順子さんは、『太陽』『宝島 30』その他、四つくらい連載を持っていた。『日本の美学』などという商業学術誌にまで連載していた。そういう雑誌の発売日が来ると、短大の授業で疲れて帰ってきた夕刻、駅の最寄りの書店へ行って立ち読みし、**憧れと嫉妬でぎりぎり脂汗を流した**。のちに私は佐伯さんの仕事を厳しく批判することになるが、その根底にこの時の嫉妬と怨恨があることは、否定できない。

・・・

が、その当時、主観的には、もう、ぼろぼろだった。一冊目を出してから五年、懸命に私はエンジンを掛けようとしているのに、まるで掛からない。私は**三十二歳**になっていた。その当時は、こういう考え方は負け惜しみかも、と思っていたが、今は事実だと言えるのは、書き手というものは、褒められたり、編集者から書いてくれと言われてたりすると、嬉しいから脳が働いて新鮮なアイデアも出るけれど、一人でやっているとなかなかやる気も起きないしアイデアも出ないものである。実に、凡庸な書き手と俊英との違いはそのために増幅されるのであって、**もともとの才能が同じくらいでも、外部から鼓舞されることがないと、才能も涸れしぼんでゆく**。もちろん、先にあげた吉村昭や宮尾登美子のように、外部が鼓舞してくれるようになるまで書きつづけるというのも優にひとつの才能であって、宮尾などは、採用もされないのに十年も書きつづけるひとは稀だ、と言われたそうである。

・・・

だが、草稿を書いて、東大の某教授に読んでもらうべく送ってから、遂に一年半にわたって読んでもらえないということがあり、私の焦りは頂点に達した。ようやく読んでもらって書き直しにかかったのは、九六年の春だった。そのころ失恋もした私は、もう自分が生きてゆく道はこれを書き上げることしかない、と思い定め、**神経症に苦しみながら**博士論文を修正していった。修正が終わった時、大学は夏休みを迎えていた。出来たら製本して送ってくれ、と言われていたので、マンションから歩いて十五分ほどの所にあるセイコープロセスという印刷会社を訪ねて製本を頼んだ。これで一区切り、と思って帰途についた時の夕焼け空が忘れられない。

・・・

同時に、今まで書いたものをまとめて新曜社から出すことも決めた。十月に新曜社から『男であることの困難』が、十二月に朝日選書から『(男の恋)の文学史』が刊行された。だが、後者をもって三度目の賭けと思っていたにもかかわらず、前者に覚書程度に書いた「もてない男はどうしたらいいのか」という趣旨のエッセイが、**世間の関心**を呼び覚ました。瓢箪から駒、の類である。同時に、『ユリイカ』から、初めて、推薦のない原稿依頼があって、「童貞であることの不安」を書いた。九七年年末には、翌年四月からということで、『朝日新聞』から、「ウォッチ文芸」の担当を依頼された。

ちくま新書が創刊されたのは、確か一九九四年だ。そのころ松居竜五に会ったら、「書いてくれて言われたんだけどね、断ったよ」と言っていた。私には執筆依頼などなかったから、平静を装いつつ、内心に**瞋恚**(しんい)の炎を燃やしていたのである。

九八年初夏だったろうか、そのちくま新書の山野浩一さんが大阪まで来て、執筆を依頼してくれた。それが翌九九年一月に刊行された『もてない男』である。すでにその時、私は先に触れた酒乱男の暴言に耐えられなくなって阪大を辞め、東京へ戻ることにしていた。『もてない男』は売れ、東京へ戻ったら、連日編集者が会いに来た。原稿依頼も次々と来た。私は三十六歳になっていた。最初の本を出してから実に九年の歳月が流れていたのだ。

「苦節十年」と書いたら、東大の某教授から、「本当に苦節十年の人に悪い」とたしなめられた。まだまだ若いではないか、と思う人もあろう。だが、これまで述べてきたとおり、周りに華やかな人たちがいると、しんどいものである。

## ・論争

さて、もう一つ、悲しいことを書かなければならない。いま述べたように、**論争**というのは、なかなか精神的にきついものである。胃が痛くなったり、自律神経失調症になったり、いろいろある。これを免れるいちばん簡単な方法は、**徒党を組む**ことである。たとえば、論争でなくとも、共産党や創価学会に所属していれば、何者かと戦うにも万事都合がいい。だから私も、共産党に入ってしまうおうか、と考えたことがあるくらいだ。

そうではない、評論家世界の派閥というものもある。私はこれも、べつだん何派にも属していない。誰か大物の後ろ楯があるわけでもない。私は『恋愛の超克』のエピグラフに、梅原猛の「戦いは、一人で、全く一人でしなければならぬ。もし**真理が味方であるならば、それにまして強い味方はないではないか**」という文章を引いたし、夏目漱石が、講演「私の個人主義」で、「**党派心がなくて理非のある主義**」だと言った個人主義を尊んでいるから、党派には属さない。もっとも、自分が親玉の党派を作る気なら、ある。優秀な若者が私を尊敬してやってきて、小谷野派の一員になりたい、とはまあはっきり言わないまでも、それが漱石山房のような一派を形成するとしたら、別に拒むつもりはない。ただ、誰もそういう若者がいないだけである。悲しいことというのは、しかし、そのことではなくて、**こういう精神的苦痛に耐えるには、妻とか夫とか恋人とか、そういう人がいたほうが**いい、ということだ。

・・・

もちろん、そんな妻ばかりではないかもしれないが、基本的に、そういう相手がいてくれるだけでなかなか精神的な支えになるものである。しかし、そういう相手を誰もが持ち合わせているわけではない。そういう時は、もちろん友人との会話などで苦痛を紛らわせるのがいいが、それでも苦しい時は、**精神安定剤**(デパス、パキシル、セパゾンなど)や**抗鬱剤**(ドグマチールなど)、**睡眠導入剤**(ハルシオン)などを用いるといい。日本ではつい最近まで、こういう薬を使うのは危険だとか邪道だとかいう風潮があったが、米国などでは、精神的ストレスの大きい仕事をする人はたいてい常用している。

まあ、評論家などというのは、あまり堅気の仕事とも言えないので、**ガタガタブルブル**、

そんな薬まで飲んで論争するなんてご免こうむる、というような人は、はなからやめておいたほうがいだろう。もっとも、自分では論争などするつもりはなくて、ただ文藝評論めいたものを静かに書いているつもりでいても、谷沢永一や私のような獰猛な生き物が嘯みついてくることがあるから、なかなか油断はできない。お気をつけあそばせ。

#### ・商業出版

だが、何を書くか。もちろんエッセイなのだから、何でもいい。何でもいいけれど、本にしてもらえなければしょうがない。そして今の日本では数多くの若い人が、物書きを目指して鎬を削り、新しいアイデアを出しまくっているから、やはり自分独自の世界を持っていなければならない。

いや、とにかく本を出すことが重要である。ただし**自費出版はいけない**。自費出版から認められるということもないではないが、やはり商業出版として出してもらえるものを書かなければいけない。だが、具体的にはどうすればいいのか。売り込むのである。二百枚以上の原稿を書いて、出版社に持ち込むのである。もちろん、それまでどういう本を出してきた出版社か、よく調べて、のことである。一冊目が出て、売れなかったら、二冊目を書くのである。二冊目も売れなかったら、三冊目を書くのである。

・・・

しかも、少しは売れるようになったとしても、作家のように儲からないのがエッセイストだ。それでもいい、**四畳半に小さな台所つきのアパート住まいでも、書いて暮らしていきたいと思う人に、私はエッセイストを勧めている**のである。本が出せるようになったら、日本文藝家協会に入れば、文芸美術国民健康保険にも入れる。

#### ・年収

早稲田の教授の年収は二千万くらいで、私は未だかつてそれほどの年収を得たことはない。

#### ・物書きというのが決して儲かる仕事ではない

本書は、平凡社新書の三宅智恵巳さんから企画書をいただいて引き受けたものだ。詳細な目次つきの企画書による書き下ろし依頼は時々あるが、たいていはくだらない人生論なので、断っている。本書を引き受けたのは、こういう題名の本がほかにないからである。しかし、引き受けると同時に、**物書きというのが決して儲かる仕事ではない**、ということは強調しなければならないと決心した。

多くの野心的な若者は、成功者を見て、自分もあになりたい、と思う。一人の**成功者の背後には、百人の失敗者がいる**ことに、**気づかない**。私もまた、そういう若者の一人だった。もっとも、別に今は成功者だと思っているわけでもない。大学に定職は得ていないし、総合雑誌からの原稿依頼も最近はない。このまま収入が先細りになったら、アパートを畳んで実家へでも帰るしかないかな、と思っている。陋巷に窮死するとまでは考えていないが、予備校の講師で糊口を凌ぐというような未来は想像している。

よく、小説は書かないのか、と訊かれる。もちろん、もともと小説家志望だったのだから、書ければ書きたいとは思っている。三十五歳の頃、歴史短編を書いて松本清張賞に応募したら、一次予選で落とされた。編集者に渡したものもあるが、いずれも返ってきた。まあ、**才能がない**のである。